

第五章 八丈島方言の系統

八丈島方言は、日本語中にあつて、系統不明な唯一の方言である。琉球語の系統さへ判つて居る今日、系統不明な言葉が日本の、しかも東京府の管内に行はれて居ると聞いて、驚かぬ人はあるまい。實に、八丈島方言は、琉球語に次いで、日本語離れのしたものである。たとへば「あなたは何かも御存じないでせうが、私は能く存じて居りますよ」を八丈島方言で言ふと「オメー、アニモシ、クオジョリイタシンジャンノーンテ、ワガヨクシクオジョリイタソワ」となる。「これが日本語か」と諸君は驚くだらう。なるほど善く見ると、オメー（御前）アニ（何）ワガ（我）等は判るが、助動詞の活用形や打消の語法などは全く獨特のもので、標準語とは勿論、何處の方言とも、關聯を見出す事が出来さうにもない。だから、東條さんの「國語の方言區劃」に曰く、

伊豆の大島には特殊の方言があるけれど、大體に於て關東方言の一種と見てよい。然るに八丈島方言は、伊豆諸島の方言とは系統の違ふものらしく、その種々なる特徴より見て之を關東方言と見なす事はできない。所屬不明の方言である、（形容詞の語尾變化などは、むしろ九州方言に近い）八丈島方言は學者の今後、研究すべき價值ある方言である。

かくして、大日本方言地圖には、八丈島の所だけ白く殘してある。「本州東部の方言」（國語科學講座）には、

伊豆諸島中では八丈島は關東方言的色彩も多分にあるが頗る異つた特色のある方言で之は系統不明と云ふべきものであらう。大島・新島・三宅島・御蔵島等は勿論、關東系のものであるが古來、交通の不便であつた關係上内地とも違ひ各島夫々特色がある。

とある。

佐藤行信の「伊豆海島風土記」（天明）には、諸島の方言について記してある。

八丈島。言葉遣ひは大に打替りたり、度々國地へも渡り、又はかな文字にても辨へたるものは、國地の言葉も通ずれど、生の島人は物毎のとなへも違ひ、五音もわかちがたく、別て女のこと葉句切りもなく、聞とりかたし、

青が島。人物も八丈に劣り、言語も猶わかちかたし、

大島。人物も新島、岡田は凡船乗にて、常に國地行通ふ故、凡俗衣食言語も伊豆の國に替らず、三宅島。伊賀谷、神着は多く船乗にて、常に江戸其外渡々に行通ふ故、風俗、言語、衣食とも伊豆國に替らず、阿古、坪田、伊豆村は山嶽を專にして、國へ渡りたる者もなき故、言語もわかりか

ね……、

新島。伊豆に遠からぬ故、言語も此國に等し、御藏島。人物も、形ちも、言語も、三宅に等し、

これによれば、八丈島と青が島との方言は判りにくい、その外の島のは伊豆に同じといふ事になる。八丈島方言の特異性は百五十年前に既に認められて居たわけである。事實、「伊豆海島風土記」に記された八丈島方言は難解極まるもので、今日の伊豆方言や關東方言と共通したものは唯の一語も無い。思ふに、この採集者は伊豆方言に精通した伊豆人であらう。その伊豆人が自分の耳に珍しいと思つたものだけを採録したのだから、伊豆方言と同じものが一つも無いのは當然である。かういふ偏つたものは系統論の資料とはならない。私は、丸尾芳男氏の「八丈島方言」(方言誌、第一輯)と本山桂川氏の「八丈島に於ける村別方言異同に關する二三の報告」(國學院雜誌、三十九卷二號)を主とし、「八丈島方言俗通誌」(大田南畝、一話一言所收)を參考して、各地方言との比較を試みる。

1 イナサ(東南風)箱館・岩手・宮城・福島・東京市・茨城・千葉・神奈川・伊豆・尾張・伊勢・志摩・和歌山・攝津・和泉・播磨・淡路・周防・四國四縣の海岸で東南風をイナサと言ふ。この外、南風(宮城・福島・茨城・伊豆新島・伊豆・駿河・土佐幡多郡)東風(岩手氣仙郡・茨城・

上總・駿河)東北風(岩手氣仙郡)西南風(宮城)南々東風(小豆島)東々南風(阿波瀬戸町)東々北風(土佐野根村)をイナサと言ふ所もある。

2 ナライ(北風)東北風をヒガシナライ(三根村)コームラナレー(大賀郷村)ヒラナライ(櫻立村)ヒランナライ(中之郷村)と言ひ、西北風をカワムラナライ(櫻立村)ヒランナレー(大賀郷)と言ふ。「好色五人女」に「ならひ風はげしく、師走の空、雲の足さへ早く」とある。こゝは冬の風だから、北風かと思ふ。「言言字考」に南來風^{ナライ}とあるが、當字の甚しいものである。ナライは元祿時代の京阪語であるにも拘らず、今日の分布は、豊後を除けば、東日本に限られて居る。方向は色々である。北風(千葉・神奈川・伊豆網代村・豊後)西風(岩手氣仙郡・宮城・福島・下總)東風(山形・静岡・尾張)西北風(宮城・茨城・上總)東北風(岩手氣仙郡・上總・神奈川・伊豆大島・駿河・愛知・志摩・三重尾鷲町)東南風(伊豆)西南風(岩手、昔の熱田)南風(伊豆松崎町)等。ナライは東京市にもあるが、その方角は或は西北風と言ひ、或は東北風と言ひ、或は東風と言ひ、報告區々である。

3 ナガシ(西南風)安房・駿河安倍郡・秋田縣平澤町・越後出雲崎で西南の風を言ふ。その外、西風(駿河興津)南風(上總・静岡縣・山形西田川郡・越後岩船郡)夏吹く強い東風(備前邑久

郡)を言ふ所もある。

4 コンド(今年)首里市で「クンド」。

5 トンメテ(曉)ツトメテの訛、古語。首里市で「ストミテ」。

6 ネ(暗礁)岩手縣釜石町・上總夷隅郡・静岡縣にある。

7 ス(暗礁)大賀郷に限って、かうも言ふ。石見邑智郡・廣島縣・長崎東彼杵郡にもある。

8 ユリ(地震)島原半島にある。

9 ヤマ(刈)静岡縣・神奈川縣で田畑をヤマといふ。

10 タバラ(田)對馬仁位でクバルといふ。

11 ソコリ(干潮)ヒソコリ、ヒソソコリとも言ふ。内地では、尾張・三重・和歌山でソコリ、和

歌山でヒソコリ、駿河でヒソソコリ、土佐でヒソコ、岡山・廣島・徳島でヒソコといふ。

12 ママ(崖)岩手氣仙郡・秋田・山形・福島・茨城・栃木・神奈川・新潟・長野・伊豆・駿河・

遠江・三河にある。昔は上總にもあつた。

13 クネ(防風林)垣をクネと言ふ所は、岩手・山形・福島・關東全部・越後・長野・山梨・静岡にある。

14 メ(接尾語)馬メ、牛メ、鹿メ、鳩メ、蟻メ等と、動物にメを附ける風は茨城・栃木二縣にある。ただし、ある種の動物に限って附ける所なら、福井縣・奈良縣にもある。

15 ササメ(鰓)津輕・盛岡でササメ、釜石でササミ、越前坂井郡でサメといふ。

16 ヒールメ(蛾)「倭名抄」に比留留、「伊呂波字類抄」にヒル、「下學集」に「易林本節用集」にヒイル、「書言字考」にヒイルともヒルともある。奥南部・岩手・宮城・山形・東京府・神奈川・佐渡・長野・美濃・和歌山・徳島・筑前・大分・宮崎・佐賀にヒール、又はその訛がある。

17 カブメ(蚊)静岡縣でカンバ、又はカンボと言ふ。これに例のメの附いたもの。日向高千穂ではカッポ。

18 アジ(蜘蛛の網)相模・川崎市でアジ、宮城・福島・茨城でエズ・宇都宮でクボネズ、佐渡・越後・越中・信州でヤジといふ。大抵、クモノを冠らせて言ふ。

19 ヨメドノ(鼠)「八丈島方言俗通誌」には、正月祝ことばとして、ヨメゴドノがある。「物類稱呼」にも、遠江には、年始にばかり、ヨメと呼ぶとある。其角の句に、「明る夜も怪のかにうれし、よめがきみ」とある。去來は「除夜より元朝かけて、鼠の事をよめが君と云にや」と言つて居る。今、ヨメゴ(岩手氣仙郡・宮城・美濃・三河)ヨメゴサン(大分)ヨメゴゼ(丹波通辭)

ヨメチ(越中・飛騨) ヨメサマ(信州) ヨメサン(信州・但馬) ヨメジヨ(天草) ヨメジヨーサン(石見) ヨメッコ(信州)等といふ。昔は上野にもあつた。

20 ツクメ(梟) 千葉縣香取郡でツク、沖繩縣でツクグル、ツクホー、チクグル、チクク等といふ。

21 ゲンビーム(かまきり) 埼玉縣のゴンベイ、又はゴンベと關係あるかも知れない。

22 ヲペフリ(せきれい) ヲペは尾の方言。オッポフリ(神奈川) ヲフリ(越中・大和)と命名の趣旨は一である。

23 コデイ(牡牛) 古語コトヒの訛。コトヒ系の言葉は九州・四國・中國・近畿・中部地方には全部にあるが、北陸は能登・加賀・佐渡・越後だけ、關東は上總・安房・相模三浦半島だけ、東北は西秋田・東岩手・東青森だけにある。

24 ジギイ(甘諸) 琉球手の訛。和歌山・中國全部・四國全部・福岡・大分にある。昔琉球芋は饅内の標準語であつた。

25 カンモ(甘諸) 沖縄・九州全部・高知・愛媛・山口・廣島でカライモ、彼杵半島・薩摩でカイモ、日向でカンコ、カンボといふ。

26 トーギミ(玉蜀黍) 内地にもトウギミ(仙臺・福島・水戸・伯耆・鹽岐) トーギン(出雲) ト

ーキミ(岩手・秋田・出雲) トウキビ(常陸の昔・越前の昔・能登・廣島・山口・四國・九州各地)等がある。

27 コーノキ(櫛) 神奈川・和歌山・岡山・長崎・熊本・鹿児島・三重・東京府・静岡・徳島・愛媛にある。甲斐ではオコウノキ。この樹の皮から抹香を作るから、この名がある。

28 ハコベラ(おぼばこ) 土佐幡多郡でハッコベ。

29 カブツ(椶) 内地にもカブチ(和歌山日高郡) カブス(伊豫大洲町) コウブツ(肥前下五島)がある。

30 ウンマ(母) 内地にもウマ(山形・吉野・三重・五島・薩摩・沖縄) ウマイ(伊豆・佐渡・岩手) ウマサン(伯耆) ウメ(伊豆・近江) ウモ(豊後の昔) ウンバ(伊豆七島・越中・吉野) ウンマイ(伊豆) ウンメエ(安房)等がある。

31 オヤコ(親類) 青森・岩手・山形・群馬・埼玉・千葉・神奈川・山梨・長野・静岡・石川・福井・愛知・滋賀・京都・伊勢・播磨・伯耆・廣島・薩摩中甌島でオヤコ、筑前でオヤコシ、オヤゴシ、秋田その他でオヤクといふ。

32 メナラエ(娘) メナラベとも。メノワラベ(女の童)の訛。琉球のミヤラベに同じ。

33 メナダ(涙)メは目、ナダはナンダの約。首里市でミナダといふ。

34 キヤーナ(肩)カヒナの説。日本紀神代卷に弱肩ヨツカシナとある。中世以後は腕全體を言つた。青森・秋田鹿角郡・岩手・宮城・駿河・尾張・滋賀・奈良・三重・大阪・兵庫・因幡・出雲・沖縄にあるが、大抵腕をいふ。たゞ因幡のは臂、出雲大原郡のは肩胛骨の邊とある。

35 マミゲ(眉毛)福島・茨城・栃木・大分にある。越前古田郡ではマメゲ。

36 オトギヤー(顎)古語オトガヒの説。東北全部・千葉・長野・山梨・奈良・大阪・中國(岡山以外)・大分・首里にある。

37 アツケー(踵)内地にもアクイ(美濃)アコ(静岡)アコイ(山梨)アツクイ(山梨・信州・静岡・美濃・尾張)アツクエ(信州)アツケ(信州)アッコイ(信州・美濃)がある。倭名抄のアコエ(距・けづめ)の系統である。

38 ヨツバリ(尿)ユバリの訛。安藝でイバリ、佐渡・加賀・淡路・石見・徳島・長門・土佐でバリ、奄美大島でシバリ、首里市でシーバイ、ユスバイといふ。

39 ポチ(足)内地では、ホタ(長野・吉野)ホダ(長野・和歌山・四國)ボタ(能登)ホダカシ(大分)ホド(愛媛)などと言ふ。足の卑語である。慶長八年の日葡辭書にもホダがある。京都

の言葉。

40 カンジョ、カンジョー(便所)内地にも、カンシヨ(越中・加賀)カンジヨ(岩手氣仙郡・仙臺・

山形・茨城・安房・石川・山梨・静岡・美濃・安藝・徳島・土佐)カンシヨ(沖永良部島)カンジヨウ(日向)カンシヨバ(越中・能登)カンゼ(日向・中嶺島・種子島)などがある。甲陽軍鑑に「御閑所……下水にて不淨を流す」とある。吾妻鏡の「武衛於閑所對面給」は離座敷で對面したといふ意味である。離れを便所の意に轉用したのは、露骨を忘れた言葉の禮儀で、便所(休憩所の意)、手水場テツヅク、後架(洗面所の意)、隠所、御不淨、化粧室、裏、用場、役場、下屋などと同じ筆法である。

41 アマ(天井)天井の上を物置用の二階に作つたもの、即ち西日本のツシ、ヅシに當るものを、アマ(遠江・富山・三河)アマダ(出雲・石見・安藝)アマダナ(遠江)アマヤ(山形)等と言ふ所がある。周防のアマダナは爐の上の物置棚である。

42 ジロ(爐)地爐である。岩手・秋田・山形・信州・加賀・日向・肥後・種子ケ島にある。相模・甲斐・信濃・伊豆・駿河ではヒデロといふ。

43 ミシヤ(土間)信州上田附近で、ツチミザ、ツチミダ、ツチメザ等と言ふ。水屋(臺所又は流

しの意)の訛かと思ふ。

- 44 ハイリグチ(上り口) 岩手・秋田にある。後撰集「いもが家のはひりに立てる青柳に今や啼くらむ鶯の聲」。東海道駿河毛四編上「はいりくちのちや屋女、おもてに出」

- 45 カマ(竈) 山形・茨城・遠江・美濃・大分・長崎・日向・鹿児島・首里。

- 46 デンギネ(摺木) レンギネとも言ふ。近畿全部・四國全部・山陽道全部・石見・筑前・筑後・佐賀・豊後にレンギ、又はその訛がある。飛び離れた仙臺にもあるといふ。このレンギとキネ(出雲の摺木方言)との複合したのがレンギネである。

- 47 キリバン(俎) 切板である。宮城・福島・茨城・群馬・千葉・埼玉・神奈川・中部地方全部・加賀・伊勢・兵庫・中國全部・九州(大分以外)にある。近松の「姫山姥」には切盤とある。

- 48 ゴキ(椀) 岩手・秋田・佐渡・山梨・富山・加賀・飛騨・三河・奈良・和歌山・石見・山陽道・土佐・大分・日向・長崎・種子ヶ島にある。

- 49 シ・ウギ(貴人の椀) 内地にも、ジャウギ(山形の昔)ジョーキ(肥前平戸)ジョーゲチャワシ(島根)ジョキ(茨城)ジョグ(加賀)ツキ(壹岐)等がある。

- 50 デイ(座敷) 近頃の方言集には見當らないが、「八丈島方言俗通誌」にある。デイの分布は東北

(秋田・福島以外)、關東(東京・栃木以外)、北陸全部・中部地方全部・伊勢・和歌山・播磨・因幡・岡山・広島・香川・日向である。意味は座敷、奥の間、客間、中の間等、所により色々である。古語出居の訛。

- 51 チョーディー(茶の間) 蒲團部屋又は物置として使はれて居る。帳臺の訛。但馬のチョッダイは寢室、越中・飛騨のチョウダも寢室。

- 52 ドンザ(襦袢) 東北(秋田以外)、上總・佐渡・伊豆・加賀・越前・三重・和歌山・兵庫・長門・香川・愛媛・高知・九州(日向不明)にある。意味は所により色々だが、ぼろを刺子にした仕事着を言ふのが元だらう。「關取千兩職」に「私がどんざ羽織でござります」とある。これはぼろ羽織の意か。

- 53 バンリョー(魚籠) 土佐で土や石を運ぶ竹製の農具をバイリョーといふ。幡多部では大荒をバエロといふ。

- 54 シャーク(大工) 首里市でキンセークといふ。サイク(細工)の訛。

- 55 オドシ(案山子) 富山・岐阜・福井・近畿(三重以外)、中國全部・四國(香川不明)、九州(佐賀以外)にある。飛離れて、岩手縣平石村にもあるといふ。加賀ではガンオドシ(物類)、尾張は

スズメオドリ。

- 56 オジヤミ（御手玉）埼玉・神奈川・山梨・静岡・富山・岐阜・愛知・福井・奈良・大阪市・兵庫・島根・広島・山口・四國全部・大分・宮崎・熊本にある。

- 57 ケツマグル（頤く）青森・岩手・山形・茨城・埼玉・伊勢・愛媛・高知にある。大阪府ではケツマク。

- 58 カマル（嗅ぐ）盛岡にある。秋田・茨城・安房・栃木等ではカム。香はカマリ（岩手・秋田）

- 59 クエル（塞ぐ）東北六縣・越後にある。クヘル、クベル、クヤスとも。

- 60 マクラカス（轉す）美濃・若狭・滋賀・奈良・和歌山・兵庫・島根で轉ぶことをマクレルといふ。薩摩ではマクイ、山形ではマゲレル、山口ではマルゲル。

- 61 ヤメル（痛む）青森・岩手・茨城・富山・岐阜等にある。

- 62 ヒール（叫ぶ）尾張にある。和歌山・土佐ではヒシル。

- 63 ナス（産む）東北全部・越後・茨城・栃木・千葉・奄美大島・沖縄にある。古語。

- 64 ネメル（睨む）奈良市にある。甲斐のネメルは狙ふ意。

- 65 ニョウ（喰る）古語ニョフの訛。静岡・三河・和歌山・岡山・広島・土佐にある。

- 66 カタル（加はる）青森・岩手・秋田・山形・長野・静岡・福井・九州（佐賀不明）にある。

神奈川・山梨・美濃からは他動詞（加へる）のカテルの方だけ報告されてゐる。

- 67 方ナル（どなる）山形・關東（千葉・相模以外）山梨・長野・静岡・愛知にある。

- 68 ワス（来る）山梨・伊豆・滋賀・奈良・宮崎・種子ヶ島にある。慶長の日葡辭書に「ワスル、来る、下賤の人につきて言ふに用ゐる」とあり、「長町女腹切」に「さつきにわたした下の町の酒屋のかみ」とある。

- 69 サンマイ（捨て置き、俗通誌）岩手東磐井郡・宮城・山形でザンマイスルと言ふ。控へる、止める、断念するの意。

- 70 マグレル（氣絶する、俗通誌）宮城・三河・佐賀・鹿児島にある。

- 71 オッカナケ（恐ろしい）東北（山形以外）、關東全部・長野・山梨・静岡・愛知でオッカナイ、大阪府でオッカイといふ。

- 72 モウニ（多き事）安原貞室の「かたこと」（慶安）に「まうに違ふ」とある。「東海道名所記」には「猛に毛がおへておせらしや／＼」とある。今、茨城・栃木・群馬・長野にある。岩手でモウト、山形でモント、相模・遠江でモウク。これはオホクと折衷したもの。

以上の共通語を地方別に合計すると次の通りになる。

東北	一〇三・五	一七・二
關東	八一・五	一一・六
三 道	一三二・〇	一四・七
近畿	六五・五	九・四
中國	五九・〇	一一・八
四 國	四一・五	一〇・四
九 州	八三・〇	一二・〇
沖繩	一二・〇	一二・〇

意味や語形の相當に違つたものは二分の一語として計算した。廢語は勘定に入れない。下段は縣數で割つたもの、即ち一縣當りの平均である。九州は陸地の七縣だけで沖縄と奄美諸島は別にした。さて、以上を見ると、八丈島方言に一番近い地方は東北であり、三道地方（北陸・東山・東海）が之に次ぐ。關東はよりから三番目である。次に縣別に調べてみると、先づ東北地方では、岩手二十七語半、山形二十語半、宮城十五語半、秋田十四語半、青森十三語半、福島十二語の順序である。岩手縣は八丈島方言に近い事日本一である。もつとも、この二十七語半の内には、舊仙臺藩に屬した氣仙郡・東

磐井郡にだけある方言が六語を占めて居る。それを除けば、南部藩方言（二十一語半）は靜岡縣方言（二十四語半）に及ばない。

次に、關東地方は、茨城十八語、神奈川十六語半、千葉十五語半、この平均十七語であるが、他の一府三縣は平均八語で全國の最下位となる。即ち、八丈島方言は、關東の海岸部の方言とは共通性が多いが、東京や山間部の方言とは似ても似つかぬものである。

次に三道地方を見るに、靜岡縣は二十四語半、即ち調査項目七十二語の三分の一を占めて居る。岩手縣と並んで、八丈島方言に近い事日本一である。愛知縣は共通語十七語半である。

以上を以て見れば、八丈島方言は黒潮方言とでも名づくべきものである。即ち、黒潮の流れる關東・東海道の海岸に最も近く、しかも、山の手とは違つて居るからである。併し、黒潮方言區といふ様なものは方言區劃上存在しないから、八丈島方言は孤立したものと云ふ外はない。思ふに、八丈島方言は鎌倉・室町時代の伊豆・相模の方言を傳へたものだらう。しかし、こゝ數百年の間に、伊豆・相模の方言は大變化を遂げたので、今では、共通性よりも相違性の方が多くなつた。無論、その間に、八丈島方言にも獨自の變化があつたに違ひない。さて、伊豆・相模を追はれた古語は、八丈島や東北地方に避難したので、今日見る様に、八丈島方言と東北方言とが類似する事になつたのだらう。九州は

地理的には遠いにも拘らず、共通性が割合に多いのも、九州には古語が多いためかと思ふ。極南の沖縄との間にさへ、八丈島との共通語が十二語ある。

最後に、八丈島方言中の古語を調べてみる。奈良朝語はコテイ(牡牛)キターナ(肩)ヨッパリ(小便)ナス(産む)の四語、平安朝語はトンメテ(朝)ヒールメ(蛾)アッケイ(鍾)オトギター(頤)ハヒリグテ(上り口)ゴキ(槐)デイ(座敷)テューデター(茶の間)ニウ(唸る)の九語、その外近世語が九語ほどある。一體、古語といふには、發生の年代の古い事と、消滅の年代の古い事と、二つの條件が必要なのであるが、コトヒヤカヒナは、今も近畿地方その他で使つて居るから、本當の古語ではない。八丈島に於ける古語の保存率は、關東や東海道に較べれば多いけれども、奥羽地方に較べれば、量的にも質的にも劣る様である。

新しい方から言へば、コックバ(臺所)などの外來語もあるけれども、文化文政頃の江戸辯の影響は殆ど認められない。